

(西暦) 2019 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

通いの場としての互助を目指した活動に継続的に参加する高齢者の特徴
—参加者の経年的な経過の分析から—

学位の種類： 修士 (看護学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 16894609

氏名：米原 拓也

(指導教員名：齊藤 恵美子 教授)

注：1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

本研究は、通いの場としての互助を目指した活動の経過とに継続して参加する高齢者の特徴を明らかにすることを目的とした。都内 A 区 B 地域包括支援センターの管轄地区で開催されている 1 か所の通いの場としての互助を目指した活動 (以下、活動) に参加している高齢者 22 名を対象とした。自記式質問紙調査と B 地域包括支援センターの専門職が記録し保管している記録資料からデータを収集した。活動設立時の 2015 年から 5 年間継続して参加している参加者 6 名については、記録資料のデータを質的記述的に分析した。

質問紙調査の分析対象 22 名は、女性 19 名 (86.4%)、80~90 歳代 16 名 (72.7%) であった。活動に参加してから交流機会が増えたと回答した割合は 68.2% であり、全員が参加を継続したいと回答していた。また、質的記述的分析対象 6 名は、全員女性であった。活動に継続して参加する高齢者の特徴として、活動開始期、継続準備期、継続維持期の 3 つの段階に区分し、23 カテゴリーが抽出された。

活動開始期では、【膝や腰の痛みから椅子や床からの立ち上がりなど、歩行動作に難しさを感じている】ことや【日常生活で、物忘れや説明を理解することの難しさを感じている】状態であっても、【痛みはあるが、杖などの歩行補助具や交通機関を利用して外出や日常生活を送ることができている】という特徴が抽出された。また、【友人や地域との交流が少なく、集団に溶け込むことが難しい】という特徴が明らかとなった。

継続準備期では、【加齢に伴う運動機能の変化から日常生活を送ることを徐々に難しく感じている】ことや、【同じ話を繰り返すことや習慣的に行ってきた内容を忘れるなど物忘れの進行を自覚している】ことから、心身機能の低下を自覚しているという特徴が示された。しかし、【健康のために自宅内でも体操を行うことや新しい運動に参加する意思を持っている】ことや、【活動内で参加者と明るく談笑して交流している】こと等、参加者同士の交流についての特徴が示された。

継続維持期では、【できる範囲で良いと足腰の痛みや加齢による運動機能の変化を受け止めている】ことや、【物忘れはあるが、メモを取ることや内容を聞き返すなど対処行動をとるようにしている】ことから心身機能の低下を受け入れながら、可能な範囲で対応している特徴が示された。また、【参加者同士が電話や声をかけ相談をし合い、関係性が親密になっている】ことや、【体調不良や相談事があるときは自身から活動スタッフに連絡し、話し合っている】ことから、【活動を一定期間休んでも、活動への参加を再開できる】という特徴が示され、加齢による心身機能の低下を受け入れつつ、活動内で開始された人間関係が親密になることで活動への継続的な参加につながっていることが示唆された。